

報告

京都大学公衆衛生大学院 (SPH) における コミュニケーション教育の現在

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻
医学コミュニケーション学分野 岩隈美穂
健康情報学分野 中山健夫

MPH(修士課程)の進路

Table The affiliations held by MPH graduates as of 2013

		Count	Percent	Number	%
Ph.D. Kyoto	内部進学	65	25.3		
Ph.D. Other	進学	7	2.7		
Other Schools	進学 (他学部)	1	0.4	73	28.4
Hospital	医療施設	21	8.2	21	8.2
	私立大学医療系	6	2.3		
	国立大学医療系	2	0.8		
	公立大学医療系	1	0.4		
	私立大学医	2	0.8		
	国立大学医	5	1.9		
	国立大学	2	0.8		
Academia	私立大学	2	0.8	20	7.8
	独法	4	1.6		
Public Research Institute	独法研	5	1.9	9	3.5
Public Interest Foundation	公益法人	6	2.3	6	2.3
Municipality	地方自治体	9	3.5	9	3.5
	私立学校	1	0.4		
High or middle or elementary Schools	公立学校	2	0.8	3	1.2
Government	中央官庁	1	0.4	1	0.4
Industry	企業	57	22.2	57	22.2
NPO	NPO	2	0.8	2	0.8
Mass communication	マスコミ	2	0.8	2	0.8
Municipality Foreign	地方自治体(外)	1	0.4	1	0.4
Universities Foreign	大学国外	1	0.4	1	0.4
Vocational schools	専門学校	1	0.4	1	0.4
Unknown	不明	49	19.1	49	19.1
Childcare leaves	休業中	2	0.8	2	0.8
Total	合計	257	100	257	100

京都大学 SPH の修士課程の特徴として、学生が各自の研究テーマを選び、1年かけて「課題研究」としてまとめることを修了要件としている。2年次に研究計画書作成、研究実施、データ解析、まとめ、報告書執筆、そして2月には卒業予定者が全員参加して2日間にわたる発表

会を開催する。入学以来座学で学んできたことを実際の研究に応用する機会を与えられ、研究者としての洗礼を受ける。この「課題研究」を経た京大修士課程卒業生たちは、博士課程後期進学、医療施設への就職、一般企業への就職を果たしている。

博士後期課程現況

Table the titles held by DPH graduates as of 2013

		Count	Percent	Number	%
Professor	教授	5	4.6		
Associate Professor	准教授	9	8.3		
Assistant professor	講師	10	9.2		
Assistant professor	助教	14	12.8		
Teaching staff	教員	1	0.9		
Researcher	研究員	8	7.3		
Research Assoc. Prof.	特定准教授	2	1.8		
Research Assist. Prof.	特定助教	2	1.8		
Adjunct Assist. Prof.	特任助教	4	3.7	55	50.5
Executive	役員	1	0.9		
President	社長	1	0.9		
Director	部長	2	1.8		
Manager	課長	3	2.8	7	6.4
President of the hospital	院長	1	0.9	1	0.9
First secretary	一等書記官	1	0.9	1	0.9
Inspector	モニタリング専門家(国際機関)	1	0.9	1	0.9
Total	合計	65	59.6	65	59.6

京都大学 SPH におけるコミュニケーション教育

本専攻には16の講座(協力講座も含む)が含まれ、医療・医学と社会・環境のインターフェイスを基軸としていることから、コミュニケーションに関心が高い。発表者の一人である岩隈は、もともとコミュニケーション学が専門で現在は医学の領域で教育・研究活動を行っている。一方で、健康情報学分野の中山健夫は医学、特に公衆衛生学・疫学専門をとしヘルスコミュニケーションに関心がある。

健康情報学分野は疫学研究による量的なエビデンスと患者の体験などのいわゆるナラティブに基づき、「生・老・病・死に向き合う時、人間を支え、励ます情報・コミュニケーションとは何か?」を問いとして研究・教育・実践に取り組んでいる。大学院では「疫学」「文献検索法」「文献評価法」「フィールドワーク」「健康情報学」「EBM・診療ガイドライン特論」「Eヘルス概論」「ヘルスサイエンス研究の進め方(2014 年度開講)」を担当している。特にヘルスコミュニケーションに関わる内容は「健康情報学」「Eヘルス概論」「EBM・診療ガイドライン特論」で提供している。特にリスクコミュニケーションに関しては「健康情報学」、ライティングを中心とした学術情報のコミュニケーションに関しては「文献評価法」と「ヘルスサイエンス研究の進め方」で取り上げている。

一方医学コミュニケーション学分野は、京大 SPH の中で最も新しい講座であり、2008年4月に開講され、健康情報学分野とともに本専攻でのヘルスコミュニケーション教育の一翼を担っている。「社会と医学をコミュニケーションでつなぐ」というミッションのもとに、「医学コミュニケーション・基礎」「医学コミュニケーション・演習」「医療社会学」の3つのクラスを SPH で提供している。その中でコミュニケーションの中でも大きなウェイトを占める非言語コミュニケーション

ョンを取り上げ(医学コミュニケーション・基礎)、コミュニケーション学のみならず障害学、社会学といったソーシャルサイエンスの視点で医学がどう見えるのか、についても授業で触れている。

本稿では、まず京都大学公衆衛生大学院 (SPH) の概要と卒業生の現況・進路について述べ、次に健康情報学分野と医学コミュニケーション学分野でのコミュニケーション教育の特徴について解説した。ヘルスコミュニケーションに興味があり公衆衛生大学院への進学を考える人たちへ参考になれば幸いである。

[参考文献]

中山健夫. 健康・医療の情報を読み解くー健康情報学への招待(京大人気講義シリーズ)第2版 丸善出版:東京 2014年

米国立がん研究所 編・中山 健夫 (監修).ヘルスコミュニケーション実践ガイド. 日本評論社:東京 2008

宮崎 貴久子・中山健夫(監訳). トム・ラングの医学論文「執筆・出版・発表」実践ガイド. シナジー:東京、2012

Iwakuma, Miho. (2014, in press). The struggle to belong. Hampton Press.

酒井郁子(編). (2005). 超リハ学ー看護援助論からのアプローチ. 文光堂. (1章担当)

杉野昭博、小川喜道(編). (2014). よくわかる障害学. ミネルヴァ出版. (2章担当)

[略歴]

岩隈美穂

米国オクラホマ大学大学院博士課程修了。コミュニケーション学博士。

[略歴]

中山健夫

東京医科歯科大学医学部卒、臨床研修後、同大難治疾患研究所疫学部門助手、米国 UCLA フェロー、国立がん研究センター研究所がん情報研究部室長を経て、2000年京都大学大学院医学研究科社会健康医学系助教授、2006年より教授(健康情報学)。2010年より同副専攻長。